The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	『排日豫防の栞』と『米化の手びき』 : 奥村多喜衛の「栞」をめぐって
Author(s)	横田, 睦子
Citation	大阪大学言語文化学. 1999, 8, p. 175-188
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/78055
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

『排日豫防の栞』と『米化の手びき』

—奥村多喜衛の「栞」をめぐって—*

横田 睦子**

There is only a hundred years' history in immigration from Japan to the United States. However, a great deal of effort has been made on the study of the early Japanese immigrants from many aspects in many fields.

My concern is to examine the Japanese immigrants and their community from 1885 to 1924, the early part of the immigrants' history, through guidebooks written by those who experienced different cultures and published in both Japan and the United States.

Among the many varieties of guidebooks, I focus on booklets and leaflets which were written in simple Japanese words and expressions. Although the rate of literate Japanese immigrants was reportedly very high, it is doubtful that all of them were able to read and understand the complicated guidebooks easily, considering the class most of the immigrants belonged to in their home country. Therefore it could be thought that many of them relied upon such short publications as booklets and leaflets.

Through this research, I hope to shed new light on certain immigrants and their community which have been neglected in previous studies.

The period, 1885-1924, falls roughly into three phases: (1) "the beginning period" when the early immigrants, including

*_Hainichi Yobo no Shiori_ and _Beika no Tebiki_—On Booklet and Leaflet by Takie Okumura— (YOKOTA Mutsuko)

**言語文化研究科博士後期課程（休学中：ウィスコンシン大学オシコシ校 非常勤講師）

government-sponsored contract laborers, crossed the Pacific Ocean for "money on trees", (2) "the peak period" when the immigrants' families including "picture brides," left Japan and the number of immigrants reached its peak; and (3) "the backlash period" when "law" had made the anti-Japanese mood more visible and material and the various rights of the Japanese immigrants were denied by their host society. In each period, the guidebooks, booklets and leaflets provided up-to-date information for the Japanese immigrants and we can observe the actual circumstances of the immigrants clearly.

A pamphlet, *Hainichi Yobo no Shiori* and a leaflet, *Beika no Tebiki* are published by Takie Okumura, one of the leaders of Japanese immigrants in Hawaii in "the backlash period". These are historical artifacts that tell us how the early Japanese immigrants tried to survive and prosper in their new world and a different culture, without as much information as we have now.

はじめに

1894年ハワイに渡った牧師、奥村多喜衛はホノルル初の日本人学校の創立者として知られている[1)]。また、奥村はハワイにおける日本人移民及び日系市民啓発運動のリーダーの一人であり、このような奥村の姿は、先行研究において「米化主義者」と紹介されている。奥村は、当時のハワイ日本人移民社会において、移民の生活改善、アメリカの基本的な生活習慣に対する理解、道徳や規律の遵守を新聞の発行、講演活動など、様々な民衆言論の形を通して異文化、すなわち、ホスト社会への「同化」を呼びかけている。その媒体の一つが本稿で「栞」[2)]と

---

1) これにさきがけ1885年、マウイ島で農業と小間物店を営むフクダ・セイジという人物がクラ（マウイ島）に日本語学校を開設したと言われている。（パッツイ・スミエ・サイキ『ハワイの日系女性―最初の百年』（伊藤美名子訳）、秀英書房、1995、pp.55-56、135。）

2) 一般に、栞とは「案内、手引き」、あるいは、「読みかけの書物の間に挟んで、目印とする短冊

(Continued)

称するリーフレット類であるが、奥村が発行した二十あまりの「栞」は先行研究の対象となっていない。本稿では1924年に実施された排日移民法を前にして奥村が発行した二つの「栞」、『排日豫防の栞』、『米化の手びき』を分析することにより、発行当時のハワイ移民社会の状況、及び奥村の周囲の論調を明らかにする。

1　前史及び時代概観

日本で本格的に移民が始まったのは明治維新以後である。海を超えての移動の目的地は北海道、樺太、朝鮮半島、台湾、中国、東南アジア諸国、そして南北アメリカであった。アメリカへ渡った日本人移民はこの一部である。日本からの初めての組織的な移民は、明治元年、無許可のままハワイに渡った、153名の「元年者」と呼ばれる人々である。しかし、この内、40名が3年間の労働期間満了前に帰国、3名が自殺しており、後続の組織的な移民は禁止される。この後、日本、ハワイ両国政府間の契約による移民労働者、945名という大量の「官約移民」がハワイに輸送されたのは1885年であった。この官約移民はその後26回に渡って実施され、約2万9千人の日本人がハワイに渡航した[3]。1885年以降の約20年間、労働力として歓迎された日本人移民への大きな排斥は単発的な事件を除くと起こっていない[4]。一方、アメリカ本土においてはカリフォルニア州を中心に黄禍論、排日論が台頭しつつあった。この頃アメリカにおいてアジア系移民の主流となっていた日本人移民は、黄禍の担い手であるかのようなイメージを付加されていたのである[5]。このような排日熱は日露戦争を境に高まり、その後の日本人移民社会は「排日」と冠される土地法、移民法等に翻弄されることになっていく。このような排日の気運が既にアメリカの属領となっていたハワイの白人支配者層に伝わるまでに時間はかからなかった。そしてアメリカ本土に限らず、ハワ

型の紙片やひも」である。元々は枝折（しおり）と記し、山道などで木の枝を折り、目印となるような場所に掛けて、帰りの道しるべを意味するものが、転じて「栞」となったことは興味深い。筆者は、この意味を踏まえて、日本人移民が、ホスト社会、アメリカで生きていくための、現実的な道しるべとした栞（リーフレット）、小冊子（ブックレット）を中心とする出版物を総じて、「栞」と称する。この他、「栞」の定義については拙稿、「日本人移民渡米全盛期の「栞」―『渡米婦人心得』をめぐって―」（『大阪大学言語文化学』Vol.7、pp.175-187）で詳述した。

[3] 村山裕三『アメリカに生きた日本人移民』、東洋経済新報社、1989、p.5。

[4] 白水繁彦「ハワイ日系新聞人の適応のストラテジー」（田村紀雄、白水繁彦（編）『米国初期の日本語新聞』、勁草書房、1986、p.286。）

[5] 麻田貞雄、『両大戦間の日米関係』、東京大学出版会、1993、p.286。

イ日本人移民社会においても「適応」、「同化」という言葉が、定住先の確保、そして排斥からの自衛手段として飛び交うことになるのである。在米日本人会の定義によると、「同化」は合衆国における「新しい状況への適応」であり、この国の「社会、政治、産業、文化諸制度への適応」である[6]。しかし、「同化」、「適応」という表現は、個々の移民社会の構成員によって、様々な視点から解釈されていた。本稿で分析を試みる『排日豫防の栞』、『米化の手びき』はこのような時代を背景に作成、発行されたものである。

2 奥村多喜衛の「栞」

奥村は書籍、雑誌の他に1920年から1939年に渡って二十あまりの「栞」、すなわち「薄手の印刷物」を発行している[7]。これらの「栞」のタイトルから、内容を分類すると (1) キリスト教信仰に関するもの[8]、(2) ハワイ移民社会を対象とした啓蒙文書[9]に大別できる。本稿で分析を加えるものは、いずれも後者である。一般に「栞」の内容上の特性として、新聞のような時間単位の速報性がないことと、時間的に多少の余裕がある雑誌、図書と比較すると実用資料としての価値が一時的であることがあげられる。価値が一時的であるということは、それらが発行された時代の言論の一片を明確に表し、後に伝えるという性質も有していると考えられる。また、その形態ゆえに、限られた字数に包含された情報は、米化主義者の急先鋒であった奥村の呼びかけを端的に表したものである。

2.1 『排日豫防の栞 第一』、『排日豫防の栞 第二』[10]

タイトルに「栞」という文字が入っているが、実際はいずれも10cm×17cm、16ページの小冊子である。『排日豫防の栞 第一』と、『排日豫防の栞 第二』とがあり、前者では、日本人移民を「アメリカという名字を持つ大家の一室に仮住まいしているもの」にたとえ、排日を「アメリカ家（け）の苦情、小言」とする

---

6) ユウジ・イチオカ『一世―黎明期アメリカ移民の物語り』、刀水書房、1992、p.127。在米日本人会の事務局長であった神崎驥一による「同化」の定義。
7) Okumura, Takie. Seventy Years of Divine Blessings. Kyoto: Naigai Publishing Co., 1940, Appendix.
8) Guide to Faith in Christ (1920), Imitate Christ (1937) など。
9) Fundamentals in Development of Japanese (1924), Future of Hawaiian-born Young Men (1928) など。
10) 奥村多喜衛『排日豫防の栞 第一』、『排日豫防の栞 第二』、出版者不明、1920。

わかりやすい説明から始まり、排日の政治的背景を述べた後、子女の市民権獲得、日本国籍離脱のすすめへと結んでいる。後者は、日系移民社会全体に対して、ホスト社会であるアメリカへの、さらなる理解の必要性を説く内容となっており、「アメリカの国柄」、「アメリカの国旗」、「アメリカ礼法」の3章からなる。

以下は『排日豫防の栞 第二』の最初の章、「アメリカの国柄」の冒頭部分である。

> 所謂排日論を煎じ詰めてみれば、『日本人は同化しない好ましからぬ人民であるから排斥する』ということに帰着する。さればこれに対して我等日本人は、我等に同化しようとする誠意のあること、同化すべく務めていること、また同化しうる可能性のあることを、事実に証明すべきである。これが立派にできれば、米人の誤解も解け、排日論の根幹は自ら壊れてしまうはずである[11]。

この部分は『排日豫防の栞 第一』の内容を総括したもので、アメリカ本土、ハワイにおいて展開されていた排日運動の中で繰り返されていた「日本人が好ましくない理由」[12]を知らしめるものである。奥村は以下のように続ける。

> 米化とは唯米国風の衣食住をすることではなく、又唯英語を話すことではない。米化とは民主思想、代議政治、自由宗教、自由教育を認め、公共に対する各個人の責任を感じ、米国旗に忠にして、一旦事あれば至誠米国家に奉ずることである[13]。

このように彼の主張は、異文化圏であるホスト社会の生活様式に形の上だけで同化することではなく、内面からの同化を強く訴えかけるものになっており、この主張はその内容の特性であるといえる。このような傾向は文中に「自由宗教」と

---

[11] 奥村多喜衛、『排日豫防の栞 第二』。

[12] スタンフォード大学社会学教授、エドワード・アルスワース・ロス博士による「日本人が好ましくない4つの理由：(1) 同化不能 (2) 低賃金労働（アメリカの労働基準の崩壊）(3) 低い生活水準 (4) アメリカ民主主義に適した政治的感覚欠如。これらは当時の排日運動の中で繰り返し述べられた。（ケアリー・マックウイリアムス（鈴木二郎・小野瀬嘉慈訳）『アメリカの人種的偏見』、新泉社、1970、p.32。）

[13] 奥村『排日豫防の栞 第二』、p.1。

いう表現を使うなど、キリスト教色を排してはいるが、同化とはキリスト教に改宗することであると説くキリスト教関係者の立場を反映していると考えられる。

この章のタイトルにもなっている「国柄」については、アメリカを (1) 共和国であること、(2) キリスト教国であること、の二つの側面から説明している。共和国であることに関しては、選挙制度と投票権について述べ、日本人移民の子女も出生届けを提出し、二十一歳になって登録すれば投票権を得ることができると説明し、「『人民に由て人民の為の人民の政府』とのリンコルンの一言は共和政体の真相を言いつくしたものである」としている[14]。キリスト教国であることに関しては、(1) 大統領就任の際には神の前に宣誓し、聖書の中から聖句を選んで公衆の前で読み上げるとするなど、政治における根拠、(2) 日曜日が単なる休日としてではなく、主の日として重んじられ、他の祭日が日曜日と重なる時は祭日を延期してでも日曜日を守っている、イースター、クリスマスが信者、不信者の別なく祝われていることなどの、社会生活における慣例上の根拠、(3) 一夫一婦制が保たれ、男女共に神の子であるという男女平等の思想があり、弱者、貧者、動物にも聖書の教訓が応用されているという、道徳上の根拠をあげている。奥村は、このようなアメリカの国柄を理解し、他のアメリカ市民と歩調を揃えてアメリカの国家社会に奉仕することが肝要であると説き、そしてこの章の最後を次のようなたとえ話で結んでいる。

> 菜の葉に生息する虫は青色である。もし赤か黒い色であったならば、すぐ空の鳥に認められ啄ばみ去らるるであろう。我等アメリカに在るものは習慣思想宗教ともにアメリカ色に化する。即ちアメリカに順応することが我等が安住発展の途ではあるまいか[15]。

次に続く「アメリカ国旗」では、アメリカ国旗の色、星、條（すじ）が表す意味、取り扱い方の心得などを説いている。そして、アメリカ国旗と日本国旗の違いを次のように説明している。

> 同じく国旗といううちにも米国旗と日本国旗とはまるで意味が違う。そして

---

[14] 前掲、pp.3-4（原文のまま）。
[15] 前掲、p.7。

> その相違は国体の相違から起こるものである。日本は君主国で……最高権力及び凡ての権力の根源は皇帝であるが、米国は民主国で、最高権力及び凡ての権力の根源は民衆である。日本人は菊の御紋章にて表せる皇帝皇室に対して忠誠を誓い、米国民は星條旗に由て示されたる米国人民に対し忠誠を表す。米国の学校にては国旗に敬礼をなせども、日本の学校にては御真影に敬礼す。即ち、米国人の星條旗に対する心情は日本人の皇室に対する心情と同一である[16]。

アメリカ国旗を「御真影」にたとえる奥村の説明は非常にわかりやすいが、その一方で、天皇は「現人神」であり、天皇と臣民は一人の人間の如く完全に一体化して日本民族と国家を形成していると教えられてきた多くの日本人移民達にとって[17]、その思想の転換は、いかに外国のこととはいえ現実として理解するには非常に困難なことであったと考えられる。また、国旗の取り扱い方に関しては、以下のように注意を与えているが、高度情報化社会と称される今日と違い、外国の国旗などを目にする機会も少なかったであろう当時の移民たちにとって、この見慣れない赤、白、青色から成る布地への意義付けは恐ろしく大変な作業であったことを物語る一節である。

> 国旗を装飾に用ゆる時は広げて掲げ、直に垂らす時は星の所が上の左の隅になる様にし、横にかける時は星の所が上の左の隅になるよう注意すべし。……また旗の上に何物も置いてはならぬ。腰掛や椅子の上にかけてはならぬ。国旗をテーブルクロスの様に用いその上に花や水呑など置いてはならぬ[18]。

アメリカ国家をアメリカ家（け）、排日論を「苦情、小言」、アメリカ国旗を「御真影」に喩えるなど、様々な教育的背景を持つ移民たちに対して、限られた字数の中で、いかに情報を明確に伝える得るかという奥村の苦心の跡とともに実際に移民たちの間で国旗の使用などに関する誤解が生じていたという移民社会の現実が伺える。

---

16) 前掲、pp.8-9。
17) ジョン・W・ダワー『人種偏見』、ティービーエス・ブリタニカ、1987、pp.180-182、pp.260-262。
18) 奥村『排日豫防の栞 第二』、pp.9-10。

2.2 『米化の手びき』[19)]

『排日豫防の栞』が小冊子であったのに対し、『米化の手びき』は14cm×36cmの一枚の用紙を折りたたんだリーフレットである。「第一」から「第三」までがそれぞれ完結した形をとっているが、1921年6月に発行された「第一」の末尾には「次の号をお読み下され」と記されており、同年8月に発行された「第二」、「第三」がこれに続いている。内容は『排日豫防の栞』で述べたものを表現を変えて繰り返したものが大部分を占めている。新たに加わっているのは、選挙のしくみに加えて、この当時既に誕生していた日本人移民の子女が、将来投票権を得てアメリカの政治に直接参加するようになるということを統計で示し、排日に気運が高まったこの時期を同化への努力をもって乗り越えれば日系移民社会の声が政治に直接反映される時が到来するということを強調している箇所である。その統計は過去の統計ではなく、この栞が発行された翌々年からの数字を予想しているものである（表1）。奥村はこの数字を表して今後十年間に合計7千9百人の

表1　1923年から1933年までに投票権を得る日本人移民（ハワイ）

年代	新たに投票権を得るハワイ生まれの未青年者数
1923	898
1924	588
1925	682
1926	750
1927	777
1928	807
1929	898
1930	920
1931	812
1932	554
1933	273

『米化の手びき』より作成

19) 奥村多喜衛『米化の手びき第一』、『米化の手びき第一』、『米化の手びき第一』、1921、出版者不明。

図１　『米化の手びき 第一』（実物大）

14×36㎝の１枚の用紙を図のように折りたたんだリーフレットである。用紙の表面、裏面が使用され、片面が９㎝ごとに折られている。この形で一面、約385字（35字、11行、縦書き）、約2,600字から2,700字の情報を掲載することができる。

「市民」ができるとしている。この「市民」とはもちろん政治に直接参加することができる「アメリカ市民」を意味している。そして彼は次のように日本人移民を説得している。

> 自分の子供を全く米国市民にしてしまうということは、先祖に対してすまぬ、日本に対して不忠である、という説は尤もらしく聞こえて多くの人の賛成し易いところでありますが、しかも之が一番に米国人の誤解と疑惑を惹起し、従って日米の関係を誤る基であります。今その理由を簡略に説明して同胞諸君の熟考を仰ぎたいと思うのであります[20]。

3 同化、適応のストラテジー

これらの「栞」を通して奥村が訴える同化はイチオカ（1992）が「外面的同化」に対して「内面的同化」とするものである[21]。日本人移民は人種的、文化的に同化できないというのが排日論者達の言い分であった。この同化不能という主張に反論するため日本人移民の指導者達は同化を二つの角度からみていた。「外面的同化」はアメリカ風の衣服の着用から、地域社会の行事への積極的参加まで、物質的な生活環境に適応することであり、加えてアメリカの生活習慣を励行することである。そしてそれだけでは不十分であると主張されたのが「内面的同化」である。真の同化とは、アメリカ民主主義の原理、慣行、そしてキリスト教的価値観の重視のような精神的同化があってこそ実現できるというものである。また、白水（1986）の分類によると、ホスト社会との接触を最小限に留め、問題が生じることを防ぐ「接触回避型」、ホスト社会からの差別待遇に内心不満は抱いているが、妥協の道を探りながらできるだけ穏便に関係を保っていこうとする「表面的協調型」、ホスト社会の文化のあらゆる側面での一体化に努めることによりホスト社会からの承認を期待する「積極的同化型」、ホスト社会の人間、特に白人支配層による民族的差別待遇に明確に異を唱え、場合によっては組織的抵抗も辞さない姿勢の「平等主義的抵抗型」の、四つの適応ストラテジーのうち、「積極的同化型」にあたる[22]。この場合のどの型にも、移民達が、排日という厳しい

---

[20] 奥村『米化の手びき 第二』。
[21] イチオカ『一世』、pp.197-209。
[22] 白水「ハワイ日系新聞人の適応のストラテジー」、pp.279-310。

現実の中に定住を選択したという前提があったのである。

4 「栞」の著者の横顔

本稿で紹介した「栞」が移民社会に受容されるかどうかは、その著者自身が移民社会においてどのような形で評価されていたかに負うところが大きい。先行研究で紹介される奥村は「キリスト教主義の積極的同化主義者」である。事実、彼は、ハワイ、マキキ聖城教会の牧師であると同時に、同化啓発運動のリーダーであった[23]。しかし、奥村の日常に言及する文献は、移民社会による奥村評価が一様ではなかったことを示している。例えば、サエキ（1995）は奥村を「熱心で真剣、献身的」であると評し、移民教育に尽力する奥村の功績をたたえる[24]。一方、芳賀（1981）は自らの移民体験から次のような証言を残している。

> 奥村牧師は白人には絶対、頭の上がらない牧師で、彼は耕主組合やアメリカ人の財閥から金をもらって、牧師に似合わない豪奢な生活をしたり、財産を持っているという。……そういえば、このマキキの教会は他の日本人教会がみな貧弱であるのに、特別に抜きんでて裕福のように見える。アメリカ人の高級住宅の一部にかなり広大な庭を持っている教会、愛友会の寄宿舎（教会運営の寄宿舎）、野球のできるくらい広い運動場、それから南キング街の堂々たる奥村牧師の邸宅。……財政には疎い、幼稚な頭しか持っていない私らも、疑問を抱かざるを得ないのであった[25]。

これらの相反する評価のいずれもが、一度は奥村牧師の教会に通った経験を持つ移民によって下されたものであるということは興味深い。いずれもが、個々の移民に映った真実だったに違いない。今となっては知る術もなく、明言できることは、奥村が自らの信念に従って、わかりやすい表現を用いた「栞」で日系移民達に「排日豫防」と「米化」の手ほどきをすることに尽力したということのみである。そして、彼の移民社会における宗教活動、社会活動、その両方における究極の目的は『米化の手引き』にひときわ大きく太く印字されている次の言葉の通り

---

[23] 前掲、p.305。
[24] バッツイ・スミエ・サイキ『ハワイの日系女性―最初の百年』、pp.84-93。
[25] 芳賀『ハワイ移民の証言』、pp.149-153。

だったのである。

> 務めて米国風に同化し、子女は順良なる米国市民に仕立てて、日米両国の関係を一層親善ならしむる生ける楔(くさび)となる[26]

5 結語

以上、ハワイ移民社会における米化主義者、奥村多喜衛による「栞」とその周辺の分析を試みた。アメリカ本土では、これらの「栞」の発行年を溯ること20年あまり前から既に形の無い排日運動が展開されており、当時の移民社会の諸団体は先を争うように「排日」を道徳的、社会的、経済的、人種的見地から詳細にその要因を分析、克服するための書物を出版している[27]。しかし、時代は思わぬ方向へと進展する。ハワイ移民社会においても移民達はついに「立法化」という形に現われた、明確な日系移民への排斥に対応せざるをえなくなったのである[28]。この対応策の一つが本稿で紹介したような「栞」の発行であった。しかし、これらの「栞」は、現実の移民社会とはかけ離れたところで機能していたと言わざるをえない。「栞」は移民社会の民衆に受け入れられるような、「同化が排日を防ぐ」という希望に満ちた内容であったが、ホスト社会、特に排日論者の前にあっては、彼らが訴える「日本人移民とその子孫は同化不能」という主張とはまさに対立するものである。同時に、これらの「栞」を手にした日系移民達全てに、有効に、そして正しく機能したとは言いがたい。同じ日系移民の地位向上を目指してはいたものの、奥村の適応のストラテジー、すなわち「内面的同化」を「追従」と批判する「平等主義的抵抗型」のグループにとっては、これらの「栞」は彼らにとって対等であるべきはずのホスト社会への屈服と黙従という「負」の情報を包含する「栞」に他ならない。しかし、これらの「栞」が、個々の移民たちの適応のあり方、また、移民社会のリーダーたちによる呼びかけの一側面の再確認を促す「道しるべ」の一つであったということは間違いない。米化主義者の急先鋒、奥村は「栞」を通して、排日運動が激化する中、極めて急を要すると考えられた

---

[26] 奥村多喜衛『米化の手びき 第二』。

[27] 南加日本人会（編）『加州排日問題真相』、ロサンゼルス南加日本人会、1913など。

[28] 例えば1913年にはカリフォルニア州議会において土地所有に関するもの、学童隔離に関するもの、白人雇用の禁止など、三十種もの排日法案が提出されている。

情報を移民社会に提供したのである。しかし、このような論調むなしく、1922年、最高裁は日本人の帰化権を否認し、ついには1924年、「排日移民法」が実施されるのであった。そして奥村が「栞」を通して訴えた「米化」のみならず、相対する「平等主義」への道も絶たれたのである。これらの「栞」は結果的に移民達への福音の書とはならなかったが、移民社会の歴史を物語る一葉の証人であり、この後の時代も続く日系移民社会における民衆言論に、まかれた種の一粒であった。また、これらが今後研究すべき多くの課題を教示する「栞」、すなわち、「道しるべ」となったことを結びの言葉としたい。

主要参考文献

奥村多喜衛『排日豫防の栞』第一、第二（出版者不明）、1920
奥村多喜衛『米化の手びき』第一、第二、第三（出版者不明）、1921
在米日本人会（編）『在米日本人史』、在米日本人会、1940
志村尚夫『概説標準目録法』、ぎょうせい、1982
田村紀雄・白水繁彦（編）『米国初期の日本語新聞』、勁草書房、1986
南加日本人会（編）『加州排日問題真相』、ロサンゼルス南加日本人会、1913
日本図書館協会資料組織化便覧編集委員会（編）『資料組織化便覧』、日本図書館協会、1975
芳賀武『ハワイ移民の証言』、三一書房、1981
パッツイ・スミエ・サイキ（伊藤美名子訳）『ハワイの日系女性』、秀英書房、1995
マキキ聖城教会（編）『奥村牧師説教集 ― マキキ聖城教会創立50周年記念 ―』、マキキ聖城教会、1955
ユウジ・イチオカ（富田虎男・粂井輝子・篠田左多江訳）『一世 ― 黎明期アメリカ移民の物語り』、刀水書房、1992
横田睦子『「栞」で読む日系移民史 ―「渡米」から「排日予防」まで』、大阪大学大学院言語文化研究科修士学位論文、1997
横田睦子「日本人移民渡米全盛期の「栞」―『渡米婦人心得』をめぐって ―」、『大阪大学言語文化学』Vol.7、1998
Okumura, Takie. *Seventy Years of Divine Blessings.* Kyoto: Naigai Publishing Co., 1940

Piercy, Esther J. *Commonsense Cataloging, A Manual for theOrganization of Books and Other Materials in School and Small Public Libraries.* New York: The H.W.Wilson Company, 1965.